

“懐かしい音楽”によって想起される自伝的記憶の諸様相

－ 青年期の人々へのインタビューを手掛かりに －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
古田 祐介

本研究は、懐かしい音楽とそれによって思い出される記憶について調べ、その記憶がどういった内容で、どのような意味を持つ記憶かを検討した。また、今回は青年期を対象を絞り、青年期心性を念頭に置きながら研究を行った。本研究を行うにあたり、青年期に該当する 10 名を募り、半構造化面接で語りを得た。

その結果、懐かしい音楽によって想起される時期は小学生時から大学生時までと幅広いものであったことがわかった。そして自伝的記憶に登場する他者は小学生時までは両親や学校の先生などの大人が、中学生以降になると同性の友達や好きだった異性など広がりが見られ、各発達段階において重要とされる自他関係が反映されていた。また、懐かしい音楽によって想起される自伝的記憶の意味付けからは現在と過去の強いつながりがみられ、今の自分にとって重要で必要不可欠な人間関係や体験であるという意味付けが行われていることが示唆された。

このことから、懐かしい音楽には、今の自分にとって非常に重要であると意味付けられる体験や、人間関係にまつわる自伝的記憶を想起させる特徴があったこと、そして、その自伝的記憶によって、今の自分と過去の自分のつながりを改めて確認することができること、さらに、その重要な記憶は音楽と密接に結びつき、青年期を生きる人々の心の中に大切にしまい込まれていることが示唆された。